別紙１－１

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　勝田順子

論 文 題 目　マレーシア語と日本語の対照会話研究
　　―あいづちとその出現環境を中心に ―

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　堀江薫
委　員　名古屋大学教授　　衣川隆生
委　員　名古屋大学特任准教授　初鹿野阿れ

別紙１－２

論文審査の結果と要旨

[論文の意義]

本博士論文は、これまで、会話分析・談話分析の観点から十分に研究がなされてこなかったマレーシア語会話を研究の主要な対象とし、会話分析・談話分析の観点からの研究蓄積のある日本語会話との対照分析を行い、さらに日本語接触場面会話の分析を、主に聞き手の反応（あいづち、うなずき）の観点から、質的・量的に行なった研究である。

日本人の会話においては、他言語話者のそれと比較して、あいづちが頻繁に打たれることが対照談話研究の分野で広く観察され、その要因として、日本の文化観（「和」、「思いやり」）や、日本語の統語構造（あいづちを入れる機会が多い）に帰する説明がなされてきた。しかし、それらは実証的分析に基づいたものというよりは、印象的に述べられるにとどまっていた。また、あいづちに関する研究は 1980～1990 年代に生産的に行なわれたが、量的分析が主流であり、質的分析が十分になされてきたとは言いがたい。一方で、口語マレーシア語の研究は散見されるものの、その数は決して多くなく、マレーシア語会話の分析（談話分析、会話分析）自体、非常に限られている。

本博士論文の意義は、（Ｉ）これまで体系的に行われてこなかったマレーシア語と日本語の対照会話分析、及び日本語接触場面会話の分析を行い、聞き手の言語･非言語行動の質･量的分析結果に関する豊富なデータと考察を提示したことである。さらに、それを通じて（ＩＩ）マレーシア語会話の談話・会話分析研究及びマレーシア語母語話者への日本語（会話）教育へ直接・間接に貢献した点も高く評価できる。

[論文の概要]

本博士論文の構成は以下のとおりである。

第１章で本論文の分析の枠組みや基本的用語・概念が説明された後、第２章では、マレーシア語の談話小辞 *kan* を考察対象とし、当該要素が複数の機能と多義性を持つことに注目し、その多義性を獲得する意味拡張経路の仮説を記述した。*kan* は、インフォーマルな会話場面において、話し手の相互行為的（間主観的）な態度を示すスタンス・マーカーの１つであり、日本語のいわゆる間投助詞「ね」、「さ」と類似した機能を有していると考えられる。マレーシア語会話において、話し手によって談話小辞 *kan* が発話された前後では、聞き手の反応があることが経験的に観察される。談話小辞 *kan* の機能獲得の過程に関する仮説を提示することで、談話小辞 *kan* と「*kan* 周辺での聞き手の反応の生起」との因果関係の有無について考察した（研究 I）。考察の結果、*kan* は元々 *bukan* という「強調否定形式」（「～の（ん）ではない」）が形態的に縮約し、文法化した結果、現代語における多機能性を獲得したことを主張した。先の仮説の妥当性を有する根拠としては、コーパスによる部分的な通時的妥当性、機能拡張の内的必然性の観点からの妥当性、他言語との並行現象からの妥当性を挙げた。

次に、第３章では、マレーシア語・日本語会話（それぞれ女子大学生の友人 2 者間会話）における聞き手の反応の対照分析を行なった（研究 II）。「分析･考察 1」では、マレーシア語の小辞 *kan*、及び類似した意味･機能を持つと考えられる、日本語の談話小辞（いわゆる間投助詞）「ね」、「さ」の発話周辺での、聞き手の反応の量的分析（生起頻度）及び、質的分析（生起環

境、生起要因、及び 2 言語間の聞き手行動の形態上の相違点）を行い、これらの分析を通して得られた、談話小辞 *kan* 及び「ね」、「さ」の機能についての知見を述べた。

まず、マレーシア語会話において、話し手によって発せられた *kan* 周辺における、聞き手の反応の有無を分析した。その結果、*kan* は様々な統語的要素（主語、述語、連用修飾語、接続語、接続節、文他）に後接するが、特に「文」に後接するものが高い割合 (61%)を占めていた。そこで、「文＋*kan*」という形式に焦点を絞り、その周辺の聞き手の反応の特徴を分析した結果、「文＋*kan*」の「文」（文の最後まで又は途中まで）を聞いてから発される聞き手の反応は、うなずき（非言語行動）でなされる一方、「文＋*kan*」の *kan* を聞いてなされる反応は、「あいづち」や「あいづち以外の言語的反応」が多数をしめていた。　一方、話し手による「文＋*kan*」の発話後、聞き手の反応がないこともあった（35%）。その場合、*kan* の機能が「傾聴要求」であること、またそれに対する聞き手の反応は、「明示的傾聴表示」（あいづち、うなずき）或いは「非明示的傾聴表示」（注視、注目行動）であり、*kan* の発話環境や聞き手の話を聞く態度といった変数によって、そのどちらかが選択されると結論づけた。

次に、日本語会話において、話し手によって発せられた「ね」、「さ」周辺における、聞き手の反応の有無を分析した。まず、「ね」、「さ」は様々な統語的要素（接続語、連用修飾語、主語、フィラー、主題、連体修飾語、文、目的語、述語、他）に後接するが、特に「文＋接続語」、「連用修飾語」に後接するものが高い割合を占めていた（約 47%）。話し手による「ね」、「さ」の発話周辺の、聞き手の反応率は 59%で、無反応(34%)よりも多かった。会話の質的分析を通して、話し手は発話に「ね」、「さ」を付加することで、聞き手の傾聴姿勢を要請している（「傾聴要求」機能）ことを主張した。またそれに対する聞き手の反応は、「明示的傾聴表示」（あいづち、うなずき）或いは「非明示的傾聴表示」（注視、注目行動）であり、「ね」、「さ」の発話環境や聞き手の話を聞く態度といった変数によって、そのどちらかが選択されるとした。この機能は、*kan* のそれと共通していることを述べた。

次いで、「分析･考察 2」では、「分析･考察 1」の環境以外で出現した、聞き手の反応（あいづち、うなずき）の質的分析を行った。具体的には、両言語話者の聞き手としての反応が生起する環境として、(1)話し手の発話の「区切り」付近、(2)話し手の発話に長音化、イントネーションの上昇がみられた後、(3)話し手に、言い淀み、ポーズなどの「トラブル源」が発生した後、(4)話し手の発話内容への「支持」、があることを、実証的に示した。とりわけ、(4)については、マレーシア語･日本語両会話において、聞き手が話し手への「支持」、「同意」を示す際に、話し手の発話が継続しているまさにその最中にあいづち、うなずきが生起していることが示された。しかし、その形態は異なっており、マレーシア語会話においては、専ら継続した複数回のうなずきによって、日本語会話では反復型あいづち（「うん」）とそれに同期するうなずきによって、実現されることが多いという相違点があることが示された。その相違の要因は、「分析･考察 1」で既に述べたように、「話し手の発話に、聞き手の発話が音声的に重複する」ことへの志向の差によると結論づけた。さらに、聞き手の反応が生起しない環境は、マレーシア語会話においては、「理解に問題がある」場合、日本語会話においては、「意見への不同意」、「トピックとして扱うことへの不同意」が示された。

第４章では日本語中上級・上級マレーシア人留学生とその友人の日本人大学生の、日本語接触場面会話及びフォローアップ･インタビュー（FI）の分析を行った（研究 III）。その結果、マ

別紙１－２

レーシア人と日本人の「規範」の相違、及び聞き手行動（あいづち、うなずき）の性質の相違による影響があることが示された。

まず、「日本人大学生が抱いたマレーシア人留学生への違和感」は、「聞き手としての反応の欠如（あいづちの少なさ）」及び「あいづちの長さが長い」という「あいづちの不適切な使用」にあった。

次に、マレーシア人留学生の「規範」には、「相手の言語規範の解釈よりも、相手の反応の意味を自分の言語規範に基づいて解釈し、ある言語行動を行う又は行わないことを選択する」や、「積極的に会話を進行調整する言語ホストと消極的に会話に参加する言語ゲストの存在の容認」があることが示された。これらの規範は、あいづちの規範からの逸脱の要因となっていたり、あるいは、「逸脱」への「留意」・「調整」の不実施の要因の１つとなっていたりした。

加えて、マレーシア人留学生の「逸脱」に対して、日本人大学生は「評価」を行わず、そのため、マレーシア人留学生は、その「逸脱」には気がつかず（「留意」せず）、「調整」を行わなかったことを示した。また、両話者間の聞き手行動（あいづち、うなずき）の性質の相違、及び、マレーシア人日本語学習者の母語の転移（あいづち、うなずき）によって、日本人の「違和感」が起こっていることを示した。結論として、中上・上級レベルのマレーシア人に対する会話教育への示唆として、「あいづちの不適切な使用」という現象に目を向ける必要性を述べた。

最後に第５章で総合的結論と課題が示された。

［審査委員会による審議および合否判定］

口述試験では、申請者の方から博士論文の各章に関しての説明が行われた後、審査委員からそれぞれに質疑応答が行われた。審査委員全員が、本研究がこれまでに研究の少ないマレー語と日本語の会話の対照研究という新規性の高い研究であることを高く評価する点では一致を見た。その上で内容、予備審査において指摘された点でまだ完全に修正がなされていなかった点や形式上分かりにくい点についての確認を含め質疑応答が行われた。特に機能主義的観点からの *kan* の機能拡張に関する研究（研究Ｉ）と、本研究の中核をなすマレー語と日本語の対照会話分析（研究ＩＩ）、さらにマレー人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面のフォローアップ・インタビューの分析（研究ＩＩＩ）という三つの相互に異なる研究成果を一つの博士論文にまとめ上げる点での整合性がやや欠けるという予備審査以来の指摘に対して、必ずしも十分に本文に改善が反映されていなかった点についての質問、指摘があった。また、マレー人日本語学習者への日本語（会話）教育に対する提案、示唆がもう少し具体的になされた方がいいという指摘もあった。

これらを含めさまざまな指摘，改善点，今後の検討についての助言があったが，それぞれの点について適切な回答が得られた。最終的に製本に提出する原稿において最大限にご指摘、ご提案頂いた内容に関する修正点を反映させることを約し、その後、必要な部分の訂正と加筆が行われた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって，本論文を合格と判断した。